



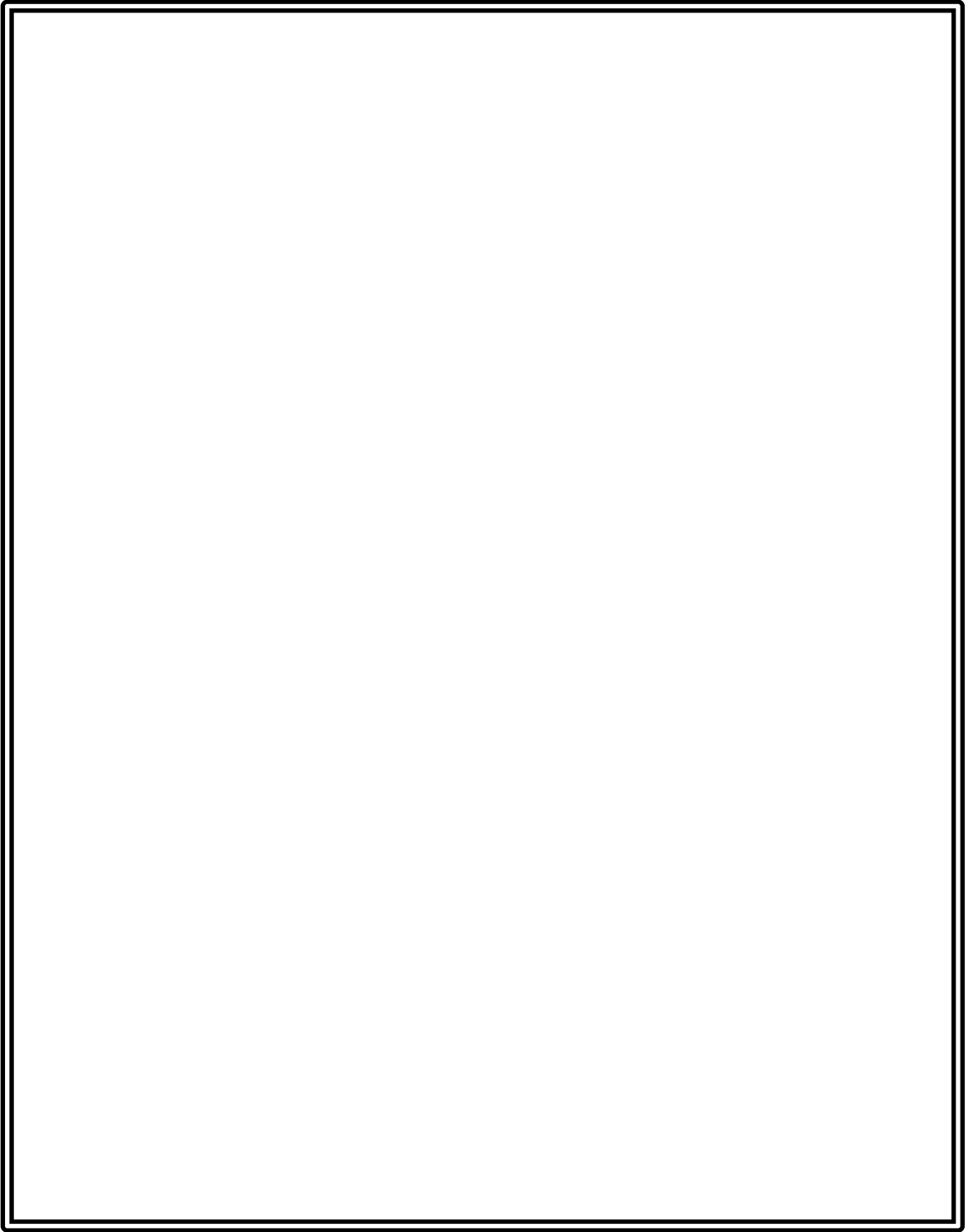
米澤穂信作品レビュー冊子



ワセダミステリ・クラブ







# 『古典部シリーズ』

「省エネ主義」をモットーに掲げる高校生、折木奉太郎。姉の指令により、高校では古典部なる部活に所属することに。そこで出会う面々や数々の謎。バレンタインに消えたチョコレート、毎週決まった時間に貸し出される本、未完成の映画、古典部が代々製作する文集『氷菓』に隠された謎…。

鮮やかな謎解きと、緩やかに過ぎゆく彼らの時間。

日常とミステリの掛け算は往々にしてジンジャーエール。それにとどまらず苦さも並立しながら清涼感を残すのが古典部シリーズの素晴らしさ。どうやっているのだろうか。

『氷菓』に始まる古典部シリーズには雪の山荘も絶海の孤島も登場しない。テーマとなるのは「校内放送」や「教師が授業中に発した一言」など、非常に身近なものが主である。

名作ミステリを「本歌取り」した、つまり現代版アップデートを施した話も数多く収録しており、そのどれもが面白い。原典と合わせて読む

と二度美味しかったりする。

映画やアニメ、マンガ等のメディアミックスも盛んなため、「入りやすい」ことも本シリーズの魅力(さらに言うと公式のムック本まである)。移ろう四季折々が美麗なアニメ、陰影が見事な実写映画、コマの隅々まで緻密に描き込まれたマンガ。いずれも甲乙付け難い出来栄え。

のんびんだらりと過ぎゆく日常に焦りを感じる今日この頃。「日常の謎」は身の周りにミステリを見つけるもの、眼に映る全てが不思議で仕方なかったあの頃を思い出すもの。いつでも何度でも読み返したい作品。



# 『小市民シリーズ』

「小市民」シリーズは、創元推理文庫より刊行中の「春期限定いちごタルト事件」、「夏期限定トロピカルパフェ事件」、「秋期限定栗きんとん事件（上下巻）」、「巴里マカロンの謎」からなる一連の作品群である。

ほどほどに善良な小市民を目指す小鳩常悟朗と、同じく小市民を志す小佐内ゆき。それに加え、常悟朗の過去を知る友人の堂島健吾。彼らの周辺で起こる謎を解決する「日常の謎系」ミステリー、というのがあえて当てはめた場合のこの話のジャンルになるだろう……が、毎回話の山場となるエピソードには警察沙汰級の犯罪行為が関わることになるので、あながち「日常である」とも言い切れないのがこのシリーズではないだろうか。実際、原作者の書いた同じく学生が主役の「日常の謎」である「古典部」シリーズと比べながら読んでみると、大分毛色が違うように感じられることだろう。

この物語を読む上でまず重要なのが、メインキャラクターの性格である。特に小市民を志す二人はそれぞれ「狐」「狼」と称されるほどのとても小市民らしからぬ強烈な性格の持ち主であり、ストーリーの中では「高校デビュー」により本性を隠して生活しながらも、度々その隠しきれない片鱗（もしくは全容）を露わにしている。普通らしく「日常」を楽しむにはいささ

か向いてないと言わざるを得ない性格をしているこの二人を好きになることができれば、この話をまず楽しめることができると言えるだろう。

また、ストーリーごとに様々なお菓子が登場するのも特徴であり、読んでいくうちに不思議とお腹が空いてくることもある。筆者などは、ある話を読み終えた後つい近い所のスーパーまでココアを買いに走ってしまった。余裕があるようならば、読書後に彼らの謎に付いて回っていたスイーツのどれかを自分で堪能してみるのもまた乙な楽しみ方かもしれない。



# 『ベルーフシリーズ』

ベルーフシリーズは記者である太刀洗万智が主人公である『王とサーカス』と短編集『真実の10メートル手前』の二冊を指す。『さよなら妖精』を含むこともあるが、今レビューでは分ける。シリーズとしては、太刀洗万智が事件を追い、その真実に迫っていくというものである。以下に書くあらすじは、ベルーフシリーズの中心、あるいは太刀洗万智の中心である『王とサーカス』である。

太刀洗は旅行記事を書くためにネパールへ赴いた。現地の少年ガイドとともに見て回るが、国王殺害事件が発生する。混乱する状況の中で太刀洗は事件の調査を開始し、独自に取材を取り付けるが、返ってきた答えは拒絶だった。落胆する太刀洗の眼前に、衝撃的で不自然な死体が現れる。この事件は、太刀洗のジャーナリズムを大きく揺り動かしていく。

シリーズは大きく二つに分けることができる。『王とサーカス』と『真実の10メートル手前』と、他の作品である。前者は彼女の一人称視点、後者は別人物の視点である。彼女は作中でミステリアスな人物と捉えられることが多い。しかし前者を見れば、つまり心中を見れば、あまりにも人間

である。苦悩し、傷つき、悲しみ、なお真実と自己を見つめ続ける彼女には多くの読者が共感を抱くだろう。彼女は冷徹ではなく、まさに顔に出づらいのだ。一方で、後者にも彼女の人間味は随所で見て取れる。「名を刻む死」や「ナイフを失われた思い出の中に」の最後のシーンには、いずれも彼女の心が表れている。

シリーズを通して書かれるテーマが、太刀洗万智のジャーナリズムである。彼女のそれは何度も危機に遭う。そしてその度に彼女は自分の答えを出していく。その成長は痛みを伴うからこそ、読者を惹きつけて離さない。きっと各事件に対して惨いと思うだろう。しかし事件を数行の記事として思い浮かべた時、同じように思えるかと考えるとぞつとする。娯楽として偏見とともに消費してしまうこと。その恐ろしさを気づかせるとともに、事件の痛みを一身に引き受けるのが太刀洗万智である。

ベルーフとは天職という意味である。危機に瀕しても、それでも貫かれる彼女のジャーナリズムを見れば、天職であることは疑いようもない。しかしそれは彼女がジャーナリズムから逃れられないことの裏返しだ。痛みも悲しみも全て背負う彼女はあまりにも尊く、脆い。そんな綱渡りを続ける彼女に対してできることは、道中の無事を祈ることだけなのだろう。



# 『さよなら妖精』

ユーゴスラヴィアという国をご存じだろうか。

一九九一年の四月、主人公はユーゴスラヴィアからやってきた、マーヤと名乗る同い年の少女と出会う。ユーゴスラヴィアは六つの共和国からなる二十世紀にできた新しい国家で、まだ、連邦全体としての歴史や文化をほとんど持たない。マーヤは「ユーゴスラヴィアの文化」を作るため、世界を見て回っているのだという。それ故に彼女は日常のささいなことに疑問を抱き、そして尋ねる。「哲学的意味がありますか？」と。雨のなか傘を持っているのに差さない男性、紅白饅頭と赤いサルビア、友人の名前の秘密。そして、一九九一年六月、ユーゴスラヴィアで、スロヴェニアの独立をめぐって内戦が始まった。二ヶ月の滞在ののち、マーヤは内戦の只中にあるユーゴスラヴィアへと帰っていく。一年後、彼女の残した謎を解くために、主人公は友人たちと、彼女と過ごした二か月を追想する。その先に導き出される答えとは――。

この小説の主人公は高校生である。受験生らしい歴史上の人物やら知識やらが各所にちりばめられていて、そこもまたこの作品の魅力の一つであ

る。高校生というのは、新しいものとの出会いにひどく揺さぶられる年頃であると私は思う。マーヤとの出会いは主人公の視界を一気に広げ、まだ見ぬ世界への憧れを強く抱かせた。しかし、マーヤと彼の間の隔絶はそんなものでは埋まらないのだ。人間の違いをあらわすときに「見えているものが違う」という表現をよく使わないだろうか。その通り、マーヤと主人公では見てきたものも、見えているものも、どうしようもなく違う。内戦が起ったときにマーヤが発した「人間は、殺されたお父さんのことは忘れても、奪われたお金のことには忘れません」というセリフは、強烈に脳内にこびりついている。彼女の見ていたものをどうしても知りたいという祈りにも似た感情が、主人公の中にはあった。私も、マーヤの見ていたものを知りたい。個人的な話だが、この作品は私が文学部にいる理由の出发点だったりする。答えはまだ見つかっていない。

序盤はあっさりとした「日常の謎」系ミステリとして楽しめるが、だんだんとこの小説の背景にある遠い異国の現実に引き込まれていく。そして、ほろ苦い読後感が、この作品を忘れられない一冊に仕立て上げているのだ。



# 『犬はどこだ』

東京から地元の八保市に戻った紺屋長一郎は調査事務所を開業する。ただしその事務所へ紺屋が仕事とするのは犬捜しのみ。そのはずだったが、開業早々持ち込まれたのは失踪人探しと古文書の解読という依頼。紺屋は古文書の解読を後輩のハンペーに任せ、失踪人の佐久良桐子の足跡を辿っていく。どうやら桐子は東京で勤めていた会社を辞め、八保市に潜伏しているらしい。次第に明らかになる桐子の失踪理由。そしてインターネッに残された彼女の痕跡。そこに紺屋は、皮膚病で退職を余儀なくされたかつての自分の姿を重ねるのだった。

一方古文書の由来を調査するハンペー。古文書が保存されている小伏町の神社、郷土史家の資料を求めて高校、図書館をめぐる内に、怪しげな男からの警告を受ける。男は何者か。そして戦国時代、二つの地方領主の勢力圏にあったとされる「山城」とは何なのか。

一見無関係に見えた二つの事件が徐々につながる時、紺屋は驚愕の全容を目の当たりにする。

取るに足らないつまらないもの、それも自分に直接の責任があるわけで

もない、しかしそれでいて理不尽とも言うべきものが自分に覆いかぶさって来たとき、一体何ができるだろうか。本作はそうした理不尽に見舞われ、抜け殻のような生活をしていた紺屋の再生の過程が、非常に丁寧に描写されている。

象徴的なシーンの一つが、彼が成り行きで犬捜しをする場面だ。犬は一つの明確な脅威として紺屋に立ちはだかるが、文中の言葉を借りると紺屋は「運命論者」の態度でこの脅威を排除する。あくまで「仕事」をスムーズに運ぶために。だが調査の中で出会った人との関わり、桐子に自分の姿を投影したことで、紺屋は主体的な意思に基づいて行動する人物になっていく。

加えてこの物語の二つの依頼は単に共通項があるだけ、といった構造的なつながりにとどまらず、二つが重なることでそこに介入する人物の真意が、強力なバックグラウンドによって裏打ちされている。

私はミステリを読んでいて、謎が明らかになることで見えていた世界が反転することに楽しみを覚えるが、本作の真相は一過性の衝撃だけにとどまらず、その余韻が紺屋、そして読者にまでつきまとう。余韻がいつまでも後引くのは、紺屋と桐子の想いがそれだけ克明に描写されているからだろう。

本作は文庫化にあたって「THE CITADEL OF THE WEAK」という英題がつけられた。弱き者の抵抗は時として残酷で容赦がない。





# 『ボトルネツク』

高校一年生の嵯峨野リヨウは亡くなった恋人、諏訪ノゾミを弔いに福井県東尋坊を訪れていた。そんな折、兄が亡くなったという知らせが母から届く。母の機嫌を損ねたくないリヨウは弔いもそこそこにとんぼ返りしようとしたその時、崖から海へと落ちてしまう。

目覚めてみればそこは見慣れた金沢の街だった。自宅に戻ったリヨウはそこで嵯峨野サキという見知らぬ姉と相対する。どうやらここは自分の代わりに嵯峨野サキが存在している世界らしい。リビングの皿、イチヨウの木、食堂の主人……。一見すると同じに見えた世界は少しずつ異なっているようだ。リヨウはサキとともに「間違い探し」を進めることで、なぜ自分がこの世界に飛ばされたかについて説明しようとする。

しかし金沢、そして東尋坊を巡る中で、自分たちを取り巻く環境は決定的に異なっていることに気づかされる。家族関係、生きている兄、そしてまるで性格の違う自分の恋人、諏訪ノゾミ。「間違い探し」の果てにリヨウが直面する残酷な結末とは。

本作と古典部シリーズは、ネガとポジの関係にあると言えるだろうか

か。同じ高校生、青春を材に取りながらも、古典部シリーズで少し顔をのぞかせるその暗部を全面に強く押し出し、残酷に描いているのが本作だ。古典部シリーズの主人公、折木奉太郎と本作の主人公、嵯峨野リヨウ。どちらも消極的な性格をしているが、リヨウの消極性には、自分を取り巻く環境、世界に対する諦念が強く表れている。彼の持つ諦念と思春期の陰が、本作の通奏低音となっている。

高校生、思春期。世間や社会に対して従順であるほど幼稚ではなく、かといってその束縛から逃れられるほど大人でもない淡い時代。自分とは何か、アイデンティティとは何か。

自己と社会の間で折り合いをつける時、周囲の圧力に敢然と声をあげられる人もいるが、誰もがそうではないだろう。リヨウのように自分の周りに吹き荒れる風を「どうしようもないこと」として受け止めたり、ノゾミのように自分を他人に明け渡したりしてしまう人もいる。自分はリヨウやノゾミほどじゃない、と思うかもしれないが、誰もが思春期にはそうした思いをふと抱くときがあるのではないかと思った。誰もがリヨウに、誰もがノゾミになりうるのだ。

もし私が、もしあなたが嵯峨野リヨウだったら、東尋坊でどちらの選択を取るだろうか。



# 『インシテミル』

コンピニのアルバイト雑誌に奇妙な求人広告が出ていた。ある人文科学  
的実験の被験者になるだけで、時給十一万二千円。一週間の短期バイトで、  
モニタリングされ続けられ寝ていても時給が発生し、千八百万円以上稼げ  
ることになるらしい。大学生の結城理久彦は車を買うため、そのバイトに  
応募した。

バイト会場には結城を含め十二人の参加者が集められた。詳細が知らざ  
れないまま、彼らは〈暗鬼館〉なる地下の実験施設に案内される。自己紹  
介をする間もなくあてがわれた個室に行くと、そこには〈おもちゃ箱〉が  
置かれていた。結城の〈おもちゃ箱〉の中にあつたのは火かき棒、そして  
メモには〈殴殺〉の文字が。翌日、〈暗鬼館〉のスタッフから、ボーナスの  
発生条件が殺人にまつわるものだとは知らされる。何もしなくても高い給料  
が出るのだからと互いに牽制しあうも、翌三日目の朝、死者が発見された  
ことで事態は急展開を迎える。

ミステリー好きなら、クローズドサークルでの連続殺人にロマンを感じ  
る人が多いだろう。雪山の山荘、絶海の孤島、移動中の飛行機や船など、

人間の出入りがなく容疑者も被害者も限られた状態で、次々に起きる殺人  
事件。生き残った人物のうち犯人は誰なのか。『インシテミル』の実験は、  
そんな状況を人為的に作り出し、被験者たちを放り込んで右往左往させる  
ことが目的である。こんなにトリッキーな設定なのに、いやだからこそ、  
境界条件のはっきりしたフェアな推理小説になっており、端正なロジック  
を味わえる。

しかし、米澤穂信の作品がただのデスゲームで終わるわけがない。特に、  
結城の境遇が二転三転していく過程には、〈古典部〉シリーズや〈小市民〉  
シリーズを書いてきた作者の手腕が遺憾なく発揮されている。推理小説好  
きであればあるほど予想しづらい展開もあり、最後までスリルが味わえる  
ことは請け合いだ。

デスゲームに参加した者がどのような結末を迎えるのか、〈暗鬼館〉の主  
催者の視点で楽しむもよし、参加者の視点で次に何が起こるか分らない  
恐怖を味わうもよし。〈暗鬼館〉に登場するミステリーによくある小道具、  
推理小説の古典にちなんだ小ネタににやりとするのも楽しい。逆に、普段  
あまりミステリーを読まない人が読めば、推理小説好きの不思議な生態を  
垣間見ることができるかもしれない。『インシテミル』のフィクションなら  
ではの面白さに、「淫してみる」ことをオススメする。



# 『儂い羊たちの祝宴』

夢想家のお嬢様たちが集う読書サークル、「バベルの会」。それを取り巻く五つの事件とは。耽美で流麗な文章に彩られた暗黒ミステリの傑作。

『身内に不幸がありました』

「バベルの会」合宿の二日前、七月三十日。会員の丹山吹子の屋敷が襲撃を受ける。それから三年経って、七月三十日に彼女の血縁者が殺されていく…。

『北の館の罪人』

六綱家当主の妾腹の子、内名あまりは母の遺言に従い六綱の屋敷を訪う。身寄りのない彼女は屋敷の別館に住まいながら、同じく別館に住む六綱早太郎の世話をすることになる。なぜ正当な当主、早太郎は館に幽閉されているのか。

『山荘秘聞』

女中の屋島守子は暇を出され、代わりに辰野家の別荘、飛鶏館の管理を任される。来る日も来る日も客を待ちわびる日々。一年後の春、彼女は雪

の中で滑落事故にあった男を見つける。

『玉野五十鈴の誉れ』

跡取りとして厳格な祖母に目をかけられている小栗純香。世間との交流に乏しい彼女にとって玉野五十鈴は単なる召使いではなく、ただ一人の友人だった。だが純香の叔父が殺人を犯したことで事態は一変する。

『儂い羊たちの晩餐』

「バベルの会」を除名された大寺鞠絵は俗物的な父への当てつけとして、料理人に「アミルスタン羊」を所望する。

一説によると毒キノコは美味しいらしい。毒を構成するアミノ酸はうまみ成分でもあるからだそうだ。

何の話をしているのかと思うかもしれないが、『儂い羊たちの祝宴』はまさに「美味しい毒キノコ」という形容が似合う作品だ。並みの毒ではなく猛毒である。読者が物語の美しい文体に魅了されているうちに、毒の塊は胎動し始め、最後には勢いよく噴出する。血の気が引き、圧倒された後は快哉を叫ばずにはいられない。

一度読んだら忘れられないほどの衝撃、おぞましい毒気がどこから生じるといえば、ひとえに登場人物たちのどこか浮世離れた語り口だろう。それがどこかクラシカルな趣を感じさせるからこそ、その下に潜むあまり



にも利己的な欲望や願いが際立つのだ。

「食べられないキノコはありません。ただし物によっては一度しか食べられないものもあります」というジョークがあるように、毒キノコは一度しか味わえない。だが本作はぜひ何度でも読み返してほしい。初読では最後の衝撃を、再読の際は構成の妙を楽しめるはずだ。

この「美味しい毒キノコ」は何度でも味わえる。

## 『追想五断章』

私は米澤穂信先生の著作の中でも『追想五断章』が一際好きだ。『追想五断章』はノンシリーズの長編小説で、〈小市民〉シリーズや〈古典部〉シリーズなどの有名な作品とは異なり、薄暗く埃っぽいような印象と独特の後味が残る小説だ。しかし、淡々と進む展開、明かされる衝撃的な真実、最後に全てが繋がり直される構成など、米澤穂信先生の技巧が光った作品となっている。

舞台は平成四年、バブル崩壊の頃。大学を休学し、伯父が営む古書店でアルバイトをしている菅生芳光の元に奇妙な依頼が舞い込む。それは叶黒白という作家の書いた五つの短編を探してほしいというものだった。一篇見つけるごとに報酬は十万円。金に目が眩んだ芳光は、個人的にその依頼を請け負う。叶黒白とは、故人であり依頼人・北里可南子の父親、北里参吾。残された五篇はすべて結末が隠されたリドル・ストーリーで、可南子は小説から消された最後の一行となる五つの文章だけを所持しているというのだ。芳光は雑誌の寄稿者や生前の知人に当たって調査を進め、断章を手に入れていくうちに、参吾が生前関わった「アントワープの銃声」という事件の真相と断章に隠された意図に迫っていく。

この作品を覆う雰囲気は非常に暗い。バブル崩壊という時代を背に、作品に出てくる全ての登場人物が先行きへの不安や挫折を抱えている。作中作として登場する北里参吾の小説もどれも薄暗く不気味な印象で、この作中作から明かされる真実も重く悲しいものだ。物語の鍵となる事件は「ロス疑惑」を彷彿とさせるもので、報道被害についての言及は（ペルー）シリーズにも通ずるものがある。読後感も清涼とは言えないが、あらゆる要素から真実が浮かび上がる構成と前提を覆されるような感覚はミステリの快感に満ち溢れたものになっている。ミステリにおいて技巧や構成を重視する人に自信を持って薦められる作品である。



# 『折れた竜骨』

始まりは一人の老兵の死だった。

十二世紀のヨーロッパ。十字軍が聖地エルサレムを巡って血みどろの戦いを繰り広げる時代。北海に浮かぶ小国「ソロン諸島」では、慎重しくも平和な日々が流れていた。しかし、自然の要塞に守られた平和にも魔の手は届く。長年に渡って夜警を務める老兵が死体となって発見され、その唇や爪が鮮血のように染まっていたのだ。死体は何らかの凶兆だ、と噂が流れるソロンに、騎士を名乗る男とその従者が訪れる。彼らは夜警を殺した（暗殺騎士）なる人物を追い、この島にやって来た。しかし彼らの助言むなしく、島の領主が何者かによって心臓を貫かれて死んでしまう。

島には「伝説の悪鬼（呪われた「デーモン」）が攻めてくる」との報せを受け、八人の傭兵が集まっていた。

動く青銅人形、塔に囚われた不死身の青年、捜査のカギを握る騎士の魔術。ミステリと魔法が見事な融合を果たした作品。

魔術、歴史、そしてミステリ。これらの色を完璧に使って織った一枚

の巨大な布、それが『折れた竜骨』である。

物語の鍵を握る魔術は魅力的なものばかり。魔術の使用痕跡を辿る「リッターの暗い光」や、「走狗」となった人間を操る魔術。楽しくってしょうがない。また、本作キャッチコピーにある「剣と魔法」の通り、迫力の戦闘描写もたまらない。伝説の悪鬼に立ち向かうは、数多の騎士に加え、弓の名手、怪力の女、巨大な青銅人形を操る錬金術師。ハリウッド映画を彷彿とさせる爆裂な爽快感。そして肝心のミステリ部分は意外や意外、ド直球の本格モノ。鮮やかな伏線回収と消去法によって徐々に容疑者が絞られていく過程はとてつもなくキモチいい。

これほどの要素を絡めてもとっ散らかった作品にはならず、むしろ相乗効果で至極の一冊へと昇華されている。「巨大に纏まっている」と形容するのが、本作の持つ魅力を的確に表現しているだろうか。

『折れた竜骨』は貴方に新たな世界を示してくれるだろう。



# 『リカーシブル』

父が失踪し、母の故郷へと引っ越してきた主人公・越野ハルカ。過疎化が進む地方都市、坂牧市での暮らしに慣れようと、慎重に中学校生活に取り組むハルカだったが、弟のサトルが不可解な発言をこぼす。それは、まるでこの先起きる事実を知っているかのような、未来予知だった。証明するかのように、町ではサトルの予言通りのことが次々と起こり始める。時を同じくして、ハルカは、未来視にまつわるタマナヒメ伝説、そして誘致運動を巡る秘密を知ってしまう。まさか、サトルの未来予知は本物の何か？ 町を覆う不穏な影と、日常に少しずつ入り込む違和感。思春期の少女の成長が切なくも愛しい一作。

リカーシブル 【recursive】

(形容詞)再帰的な。自分自身に戻ってくるような。プログラミング言語においては、処理中に自らを呼び出すような処理をいう。(米澤穂信『リカーシブル』新潮社 二〇一五年)

本作を読み終えたばかりの人間が、この文章を見たならば、言いよう

ない気持ちに襲われるのではないだろうか。

主人公であるハルカは、言ってしまうえば少々擦れている。母とは適切な関係を保ち、見知らぬ土地という自身にとつての「アウェイ」をよく理解し、教室の空気を読むことにも長けている。そんな彼女の関心は初め、「うまくやる」ことに終始していた。しかしそれは、弟・サトルの言葉によつて一変してしまふ。伝承を探るうちに、敏い少女はそれが触れてはいけないものだど知るが、ハルカは核心へと迫ることをやめない。その理由がいったい何だったのかということは、本作において謎の真実と同じくらいに重要な要素だろう。

ハルカの家族環境は、決して単純なものではない。母親に対する不自然な態度。ハルカ曰く「弟ではない」サトル。そして、消えた父親。町を取り巻く不穏な雰囲気だけではなく、家族との関係においても、どこか薄氷の上を歩いているような緊張感がある。

物語は最後まで、ハルカの語りで進んでいく。だからこそ、読者はハルカの心情の些細な機微、視線や思考のひとつひとつを見逃すことがない。ハルカを感じるすべてと、張り巡らされた伏線の数々は、読者の目の前にも差し出されている。驚くべき真相もさることながら、少女の確かな歩みに心動かされるのが、どこか嬉しい作品だ。



## 『満願』

形式、内容ともに米澤穂信作品随一のバラエティと完成度を誇る短編集。二〇一四年の各種ミステリーランキングにおいて史上初の三冠を獲得し、二〇一八年には「夜景」「万灯」「満願」の三編がNHK総合テレビでドラマ化もされた。名実ともに代表作としての地位を築きつつあるこの作品に収録された短編は、人間の情念、あるいは過去の記憶をもう一度辿りなおすという点においてどこか連城三紀彦を思わせる内容となっている。実際、米澤穂信はインタビューなどでたびたび連城美紀彦に言及しているのだが、二人の作品に共通点はあるだろうか。「謎」が提示され「解決」されるのがミステリ小説だと定義すれば、多くの作品は「謎」が多種多様なトリックによって「解決」されるという構造になる。対して、連城三紀彦は初めに提示された「謎」そのものを万華鏡のごとく七変化させることに重点を置いた作家だといえよう。「古典部」シリーズの一部の作品やこの『満願』において米澤穂信が行っていることも、これに近いのではないか。「謎」の形を隠蔽する手つきの鮮やかさに読者は幻惑され、快感を覚える。連城三紀彦と米澤穂信の作品に共通点があるとすれば、それは読者が「快感」に至るまでの過程にあるのではないか。最後に付け加えると、バンブーラデシユのガス資源を巡る犯罪を描いた「万灯」は、『真実の10メートル手前』

『王とサーカス』にも共通する米澤穂信ならではの魅力、ジャーナリズム的感性を備えた作品として、短編集のなかでもひと際輝きを放っている。





## 『本と鍵の季節』

ゆかれる、不思議な一冊だ。

「古典部」シリーズ、「小市民」シリーズに続く、学園を舞台にした最新の米澤穂信ミステリ。堀川次郎と松倉詩門の二人が図書委員として働く図書室に、学園の生徒が様々な謎を持ち込んでくる。六つの短編が収録されているが、回を追うごとに二人の立ち位置、関係性が少しずつ明らかになり、ある種のバディものとして読むことも可能。「古典部」「小市民」において登場人物たちに与えられた役割はそのまま彼らのアイデンティティに直結し、時折それが屈折した形で噴出することが「ほろ苦さ」として読者の間で受け入れられてきた。米澤穂信の学園ミステリに登場する高校生たちは決してお互い「分かり合う」ことなく、どこかに屈託を抱えながら生きていくことを選択する。同じく学園を舞台にした本作もその例に漏れず、一見息の合ったバディに見える堀川と松倉は根本的な部分ですれ違い続けている。一言で言えば性善説の堀川と、性悪説の松倉、謎に向き合う際の二人の対照的な態度が、やがて物語全体の核心へと至るための布石となるだろう。すれ違いは積み重なり、最後の「友よ知るなかれ」で決定的に崩壊してしまうようにも見えるのだが、それだけでは終わらせないところが米澤穂信のうまいところでもある。軽妙洒落な会話の応酬に気を撮られてみると、いつの間にか「学園ミステリ」のまだ見ぬ地平にまで連れて



## 『Iの悲劇』

シリーズものを除けば、現時点での最新作。過疎化によって「一度死んだ村」南はかま市叢石を甦らせるため、主人公たち市役所員にあるプロジェクトが課せられる。それは、出身地とは異なる地方集落に移住することを意味する「Iターン」を叢石において推進させることだった。しかし、このプロジェクトに誘われて叢石にやって来たのはひと癖もふた癖もある困った任人ばかり。彼らにまつわる様々な「Iターンの悲劇」すなわち「Iの悲劇」が、連作短編集という形をとって語られる。

古くなった部品を取り換えていくうち、最終的に全ての部品が新しく取り換えられてしまった船は果たして元と同じ船と言えるのか、という有名な「テセウスの船」の挿話から小説は語られ始める。船を村に、部品を住人に喻えたこの皮肉な幕開けは、叢石のIターンプロジェクトを待ち受ける不穏な未来を読者に予感させることだろう。さらに、この「テセウスの船」の挿話は作品全体を貫くひとつのイメージに繋がるのだが、それを見つめるにはまず小説の「舞台」に注目する必要がある。「Iの悲劇」はいかなる「舞台」の上で演じられるのか。Iターンによって集まった任人はお

互い「地縁」も「血縁」も持たない赤の他人どうしであり、言うなれば叢石は「継ぎはぎの村」に過ぎない。そんな場所で発生する事件——謎——は当然、たとえば横溝正史作品のそれとは性質が異なるだろう。ミステリ小説の性質はその「謎」の性質によって、「謎」の性質は小説の「舞台」によって決定される。因習に囚われた村、絶海の孤島、奇矯な建築家が建てた館、あるいは箱庭的な学園、いずれの「舞台」を選択するかによって「謎」の性質も変化するとすれば、「継ぎはぎの村」で起こる「謎」はどのようなものだろうか？ いずれも単体で完結した六つの短編を序章と終章で綴じ込み、連作という形で一冊の本にまとめたとき、「継ぎはぎの村」のイメージと「謎」の全体像が読者の前に浮かび上がる。『氷菓』『インシテミル』『折れた竜骨』といった代表作をいくつか思い浮かべれば、米澤穂信が「継ぎはぎの村」という今までにない「舞台」を選択して短編集を書き上げたのであれば、これを読まない手はないだろう。





# ワセダミステリ・クラブ

<http://wmc-mw.sakura.ne.jp>

制作：ワセダミステリ・クラブ 編集

発行：2020年10月22日